

東京バッハ合唱団 月報

[第 505 号] 2004 年 7 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3Web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO
Monthly Newsletter No.505
July 2004

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

アンメ牧師追悼と橋本さんの指揮

第 95 回定期演奏会

室田 悟 (団員 : パス)

今回は2つの点で、感銘深い演奏会となりました。ひとつは、去る2月27日、長年お世話になったベルリンのグンドルフ・アンメ牧師が天に召され、その追悼の意を込めてモテット第4番《恐るな われ なれと共にあり》を歌ったことです。

アンメ牧師は、20余年にわたって私たち合唱団と共に行ってくださいましたが、個人的には、93年夏のドイツ演奏旅行がとくに思い出に残っています。

演奏では、ケペニックのラウレンティウス教会で、今回も取り上げられたカンタータ第78番《イエス わが心を》の練習のときのことで、ソプラノとアルトの二重唱 急ぎゆかん 弱くともたゆまず を下に降りて聞いたときに、歌声が天から降ってくるように感じられたこと。アンメ牧師が、旅行社の手違いで数時間も待たされたにも拘わらず、笑顔で私たちを迎えてくださったこと。ケペニックの駅のホームでお別れのとき、いつまでもハンカチを大きく振っていらっしたこと、等々。ベルリンと東京・1万キロの距離を超えて、隣人のようにいつも優しく見守り、支えてくださいました。

その93年のドイツ旅行の頃から親しくしていただいている橋本眞行さんが、今回の定期演奏会の前半を指揮されました。その才能と指導力は合唱団の誰もが認めるところですが、リハーサルのときは緊張の色が見て取れました。しかし本番が始まると、堂々と演奏者全員を引っ張って音楽を作り上げていらっしました。

いつもならば、演奏の内容や合唱団の出来などが気になるところですが、今回はそういったことがどこかへ吹き飛ばすほどの、印象深い演奏会でした。

日時：2004年5月9日、16時開演

会場：石橋メモリアルホール

曲目：

- カンタータ第93番《ただ 主によりたのみ》
- カンタータ第99番《神の御業こそ ことごと善けれ》
- カンタータ第77番《主を愛すべし 心のかぎり》
- カンタータ第78番《イエス わが心を》
- モテット《恐るな われ なれと共にあり》



第95回定期演奏会リハーサル風景。指揮は橋本眞行氏。画面前列は左からソプラノの光野孝子さん、アルトの佐々木まり子さん(写真・松尾茂春氏)

第95回定期演奏会アンケートより

今回のアンケートでは、訳詞に言及された方が多く、レチタティーヴォにも及んで(たとえばBWV99, 第4曲)これは「私の信仰の希望」というように共感を示されました。

BWV51-100のうちから選ばれたのは、

BWV71 ... 1票, BWV77 ... 1票

BWV78 ... 4票, BWV99 ... 3票

で、演奏もBWV99、78、およびモテットBWV248が良かったという声が多く聞かれました。

目下進行中のシリーズ企画(BWV番号の50番ずつに区切って年5曲を選曲。2003年-2007年予定)の原案では、当合唱団ですでに3回以上演奏されたものは除くという原則でしたが、名曲中の名曲として名高いBWV1, 78, 147の3曲だけはもう一度上演してほしい、との団内外の強い要望にお応えし、例外として加えたものでした。

案の定、BWV1(2003年)と今回のBWV78には、大きな反響がありました。残るは2005年上演予定のBWV147で、これは現在編集作業中の「カンタータ50曲選」最終回配本の楽譜10冊のなかの1冊として、今秋発刊の予定です。ご期待ください。

私にとってのバッハ演奏の意義

藤田 正記（団員：バス）

私は昨年6月、東京バッハ合唱団に入団しましたが、12月の定期演奏会には所用があって参加できず、今回はじめて定期演奏会のステージに立ちました。

最初に自己紹介を兼ねて、私が合唱活動を始めてからこの合唱団に入団するに至った動機について記し、私にとってバッハを演奏する現代的意義を考えてみたいと思います。これについては、戦争と平和に関わる個人的体験が伏線になっているので、簡単に履歴と合唱歴を書きます。

私は、1941年中国長春（当時の満州国新京）で生まれ、敗戦の最中父は病死、母は失踪。幸いにして残留孤児となることなく日本人に引き取られて帰国。その後、人並みの教育を受け、大学に勤務することになりましたが、大学紛争を契機に、世界の人々の連帯を高らかに歌う「第九市民合唱団」に入り、以来オーケストラと共にオラトリオやミサ曲などを唱う大合唱団に転じて、途中休止はあるものの今日まで約30年間唱い続けてきました。

15年前に北京大学に出張した際に、中国人留学生の案内で蘆溝橋を訪ね、中国人民抗日戦争記念館で日本軍の中国侵略の生々しい実態を見、自己の幼児体験と重なり、「今後、中国をはじめアジア諸国民はもとより世界の人々と絶対戦争をしてはならない。また戦争に加担してはならない」と、一人の日本人として不戦の誓いをしました。

1995年、東京とベルリンとの友好姉妹都市締結を記念してベルリンでベートーヴェンの《第九》とバッハの《クリスマス・オラトリオ》を日独合同で演奏しましたが、旧東ドイツ市民が独裁体制を打破してドイツ統合を実現した時、《第九》を歓喜して唱い、その後も記念行事に《第九》を唱って多くの市民が連帯の絆を深めている光景を見ました。また、旧東ドイツ地区では西ドイツ地区との経済格差と失業を抱えた深刻な状況の中で市民が教会に集い、静かに祈りを捧げていました。ライプツィヒの聖トーマス教会で日曜礼拝に参列した時、今回唱ったカンタータ第93番《ただ主によりたのみ》と同様、厳粛な雰囲気にも包まれ、「バッハは今も生きている。人々に生きる力を与えている」と実感しました。

2000年のミレニアムに私はイスラエルに行き、エルサレム旧市街でイエスの十字架の道を辿り、ゲツセマネで祈り、オリブ山に登ってイエスを追体験しました。また、エルサレムの他にベツレヘムなどパレスチナ地区を歩いて、イスラエル・パレスチナ紛争の現実を見てきました。嘆きの壁近くで爆発があり、警官に立ち入りを禁止された経験もしました。ヤットバシエム記念館（ホロコースト）では600万人のユダヤ人がナチ

ス・ドイツによって虐殺された記録を見、今度は逆にイスラエル政府がパレスチナ難民キャンプをホロコースト化しようとし、自爆テロと報復の殺戮の連鎖が激化している現在、世界各地で多発している紛争を見るにつけ、イエスを磔刑して以来、人類は歴史から何一つ学んでいない、という愚かさの極みを痛感するので

す。
私は、これらの体験を経てこれまでの合唱活動を顧み、定年退職を機に残された人生をいかに過すかを考えた時、神の人に対する愛を礎とした平和の思想を心血注いで作曲したバッハのカンタータを唱って私の身の廻りにいる人達に聴いてもらおうと決意し、東京バッハ合唱団の門を叩きました。

今回の定期演奏会で演奏したカンタータ第77番《主を愛すべし 心のかぎり》では、天上からトランペットがモーセの十戒「汝殺すなかれ。……」（旧約）を奏で、これに呼応して 主を愛すべし 心のかぎり 霊のかぎり 力のかぎり 思いのかぎり。隣人を愛せ おのれのごとく（新約）と繰り返し繰り返し合唱しましたが、この隣人とは「自己に敵対する人であっても愛せ」と言っているのです。これを今日の問題に照らしてみると「国際テロの脅威があるからと言って他国を侵略し、罪のない人々を大量殺戮するのではなく、人知を尽くして平和的手段で国際紛争を解決しなさい」とバッハは演奏者に唱わせているのです。

東京バッハ合唱団では、財団法人日本力行会の依頼を受けて、来る10月23日（土）力行祭コンサートに出演することになりました。同財団は100余年の歴史を持ち、国際協力と教育事業を行なってきましたが、現在145名の外国人留学生が滞在しています。

このコンサートでは、カンタータ第30番《喜べ 救われし民》とカンタータ第78番《イエス わが心を》からの数曲を唱いますが、アジア諸国などから来ている次世代の若者に、私達が真の国際平和を祈念して唱っていることを知ってもらいたいと思います。そして、彼等に「母国と日本のため、世界のために、掛け橋となってもらいたい」と念願しています。

定演資金づくりの団内バザー、年2回（1月、7月）に

いつも厳しい運営を迫られている定期演奏会のために、合唱団ご支援のみなさまからのバザー用献品は、いまや欠かせない貴重な財源となっていますが、「いつ送ればよいのでしょうか」と遠慮がちのお問合せを時々いただき、恐縮いたします。

いつでも、ありがたくお受けいたしておりますが、それでもお覚えいただく一応の目安として、お歳暮・お中元の品物の動きの多い、1月と7月を受付月間とさせていただきます。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

合唱団演奏会会計係

レチタティーヴォと 福音書中の人物のせりふ

大村 恵美子

レチタティーヴォ

一般に<レチタティーヴォ-アリア>のセット(以下の文中および表中にR-Arと略記)になっている曲は、たとえば器楽曲における<前奏曲-フーガ>などのように、あらかじめレチタティーヴォで、表現すべき内容の所在、雰囲気などを簡潔に醸しだし、ひきつづきアリアで、開花充実させるという趣向になっている。

《マタイ受難曲》の場合も例外ではないが、とりわけレチタティーヴォは、時間的な規模では短いながら、単にアリアの前座を果たすだけでなく、それ自体として出色の個性を帯び、強い感銘を与えるものが多い。

先述したものもあるが、いま全体的に順序立ててあげてみると、レチタティーヴォを伴わないアリアは、Nr.8, 27a, 30, 39, 42の5曲であり、R-Arの形をとるのは、残る10曲である：Nr.5, 12, 19, 22, 34, 48, 51, 56, 59, 64(月報502号4ページの表<「マタイ受難曲」全体のなかの独唱アリアの配置>参照)。

そのほかにもう1つ、Nr.67レチタティーヴォのあとには、アリアではなく、Nr.68の最終合唱がつづいて、全曲を終る。

レチタティーヴォを伴わない5曲のアリア

・Nr.8 アリア(S) : Blute nur <破れよ 心よ>

Nr.7でユダの裏切りが語られるとすぐに、堰を切ったように、激情的なアリアが生々しく歌い出される。

・Nr.27a アリア(S/A, 合唱) : So ist mein Jesus nun gefangen <わがイエス 捕らわる>

Nr.26でイエスがユダに「なにゆえ来たる？」と問いかけるや、群集がかかってイエスを捕らえる。そのショックに、一瞬の静寂があり、レチタティーヴォなしに歌い出される女声二重唱は、両手をぎりぎりとして揉みしだくような、縄をない合せてゆくようなカノン型。この劇的な捕縛の場面に取り残され、放心状態にいる女性2人に、イエスの信奉者たちの合唱が、「待て、主を放せ」と3回叫んで割りこむ。これはむしろ目撃者たちの声というよりも、現にこのドラマを聞いて感情移入しきっている聴衆自身が、思わず発する声のようである。

・Nr.30 アリア(A, 合唱) : Ach, nun ist mein Jesus hin <ああ 今やわがイエス去りぬ>

第2部の開始にあたり、旧約聖書の雅歌6:1の、男女相聞のやさしい言葉が、独唱と合唱との間に交わさ

れる。これから始められる苛酷な裁判と処刑の苦しみに耐えられるように、あらかじめ心を整え、神の慈悲にとりすがろうとするかのように。

・Nr.39 アリア(A) : Erbarme dich, mein Gott <憐れみを 主よ>

Nr.38の「(ペテロ)外に出て いたく泣けり」に続くアルトの血を吐くような、イエスへの呼びかけ。この後にはもう、沈黙と涙しかありえない。レチタティーヴォで気持ちをまとめる余裕すらく、アルトは「憐れみを」と、ここでただ一つかしかない気持ちを、冒頭からぶつける。

・Nr.42 アリア(B) : Gebt mir meinen Jesum wieder <返せ ふたたび わがイエスを>

Nr.41のレチタティーヴォで、ユダと大祭司たちの間で、裏切りの代償金についてのいざこざがあり、ユダは進退に窮して自殺する。そのもどかしい成り行きに弟子たちの怒りは高じて、Nr.42の激しいアリアとなる。ここにもレチタティーヴォの入る余地はない。

独自に個性的なR-Ar型のレチタティーヴォ

その他の、アリアの前におかれる10曲のレチタティーヴォは、どれも素晴らしいのだが、とくに、続くアリアとはまた趣を異にする例を、いくつか挙げておきたい。

ちなみに、《マタイ受難曲》では、全曲の要(かなめ)となる福音史家(テノール)の聖書朗読の大部分が、セッコ・レチタティーヴォ(簡単な通奏低音のみの伴奏による語り。これに対し「アコンパニヤート」は、通奏低音の上に弦楽器、管楽器などを加えて伴奏される)の形をとっている関係で、アコンパニヤートのR-Ar型レチタティーヴォのほうは、オブリガート楽器に彩られて、強い印象を与えている。

これに属するレチタティーヴォの各オブリガート楽器は、以下のとおり：

Nr.5 : フルート

Nr.12 : オーボエ・ダモレ

Nr.19 : リコーダー / オーボエ・ダ・カッチャ

Nr.22 : 弦

Nr.34 : オーボエ / ヴィオラ・ダ・ガンバ

Nr.48 : オーボエ・ダ・カッチャ

Nr.51 : 弦

Nr.56 : フルート / ヴィオラ・ダ・ガンバ

Nr.59 : オーボエ・ダ・カッチャ

Nr.64 : 弦

・Nr.12 レチタティーヴォ(S) : Wie soll mein Herz in Tränen schwimmt <主に去りゆかれし 憂いに沈むとも>

Nr.11のイエスの最後の晩餐の言葉を受け、オーボエ・ダモレ2本のゆれ動く3連符にのって、ソプラノは、この世の別れのときまで、主イエスが弟子たちに愛の遺言と行為を残してゆくことを、しみじみと告げ

る。つづく Nr.13 アリアでは、ふっきれた気持ちで、イエスの愛を浴びて、いまや身も心もイエスに従い、イエスのなかに自分を投入させようと、けなげに前進する。オーボエ 2 本も、アリアでは上昇的な音型でたえず明るくソプラノを励ます。

・Nr.19 レチタティーヴォ(T, 合唱 コラル):

O Schmerz! Hier zittert das gequälte Herz <いかに 主の心ふるえ>

Nr.19 の場合は、レチタティーヴォながら 30 小節と長く、テノール 独唱の合間に、合唱 が主要コラルのひとつ「わが主イエス なにゆえなれは」(“Herzliebster Jesu, was hast du verbrochen” 詞 Johann Heermann 1630, 曲 Johann Crüger 1640)の第 3 節を、静かに、しかもはっきりと歌いこむ。レチタティーヴォというより、独立のアリアといってもよいほどの内容をもっている。テノールは、絶望するイエスを見守る弟子の熱烈な同情。合唱のコラルは、イエスの贖罪の意義を静かにうたって、テノール(動)と合唱(静)のコントラストをつくる。

同じテノール と合唱 とでつづく Nr.20 アリアは、子守歌である。もはや Nr.19 のように、目の前で受難の道をたどる主の姿はなく、ただその壮烈な逆転劇、主の死によってわれわれが救われる、この一事について、テノール は、目覚めていよう、と呼びかけ、合唱 はそれをうけて、そうすればわれらの罪は眠りこむのだ、と応答する。すこし修辞趣味の優れた、弟子たちの逡巡に対する慰めと考えられようか。すでにイエスの十字架死と復活の意義を明かされて悟った、現時点の信徒の立場から、Nr.19 の現場に私たちが居合わせたらこうも歌ったろうにと、つづくアリアで歌い改める感じである。

・Nr.22 レチタティーヴォ(B) および Nr.23 アリア(B)については、すこし立ち入って考察したことがあるので(月報 No.401, 1995 年 11 月),ここでは省略するが、弦合奏でイエスがひれ伏し祈る描写は、迫真的な訴えとなっている。

《マタイ受難曲》の後半、第 2 部に入ると、いよいよ冴えは増してくる。

・Nr.34 レチタティーヴォ(T)

イエスの沈黙を、オーボエ 2, ヴィオラ・ダ・ガンバ, 通奏低音による、和音のスタッカートと休符の規則的な交替で刻みつける。

・Nr.48 レチタティーヴォ(S)

オーボエ・ダ・カッチャ 2 を伴ったソプラノ が、イエスの高貴さを、この世的な彩りのなかに述べたてる。それが Nr.49 の真実的なアリアを際立たせることになる。通奏低音の支えを省く(欠如), 中声部のオーボエ・ダ・カッチャ 2 本による和音の上に、フルートとソプラノの、宙空にたゆたうような高声部の 2 本の旋律。《マタイ受難曲》全体の間において、あわただしくリアルに進行する受難劇が、「十字架につけよ」という荒々

しい群集の喧騒のさなかに、はたと止まるひと時である。

・Nr.51 レチタティーヴォ(A) も、早くに指摘したところだが、イエスの鞭打ちを、おもいきり真正面から見つめて、飛び出していった刑吏の手を抑えんばかりに、叫ぶ。つづく Nr.52 のアリアで、その迫真性は、自分の心のなかでの献身の思いに昇華されてゆく。

・Nr.64 レチタティーヴォ(B) 中の白眉は、この、イエスの死後の静けさをうたうバスの歌で、つつまじやかな弦合奏にのって、ノアの洪水後の平安と、イエスの遺体の、ことの成就した落ち着きを、関連づけながら示す。つづく Nr.65 のアリアは、その静寂をやぶり、怒涛のようにほとばしり出る信頼、希望、喜びほとんど復活の主を今にも仰がんばかりの大肯定の歌となる。

このように、R-Ar の対比は、一つ一つ異なってまことに多様である。

福音史家とイエス

テキストの成立年代を考えると、イエスの死後しばらくして成立した「マタイによる福音書」は、時系列でいえば、《マタイ受難曲》のなかでもっとも古い部分(西暦 80 年代)であり、そのあとに「コラル」(主要な 3 つのコラルの作詞は 3 曲とも 1600 年代)がつづき、そして、もっとも新しいのが、ピカンダーの作詩台本の部分(バツハと同時代)となる。

福音書の引用箇所中、中核をなすのが当然イエスの言葉であり、その前後の脈絡を、福音史家が、マタイ福音書 26:1-27:66 全体をとおして、忠実に朗唱する。

イエスは、Nr.1 冒頭合唱がおわると、Nr.2 から早々に登場し(マタイ 26:2), Nr.61a で最後の言葉を発して息を引きとる(27:46)まで、レチタティーヴォまたはアリオゾの形で、弦合奏の光背を伴いながらうたってゆく。多様な相手との、ごく短い対話のやりとりであったり、長く内容豊かな、Nr.11 の「最後の晩餐」の、ほとんどアリアに近いような言葉(26:23-29)であったりする。その臨終を告げる Nr.61a から後は、役を終えてしまう。

福音史家は、Nr.2 における福音書 26 章の冒頭から、Nr.66c「かれら行き、番兵もて墓固め、墓石を閉ざす」(27:66)まで、休むことなく、全登場人物の間をとりもちながら、劇の筋をつないでゆく。イエスと福音史家が要となって、全体をまとめているのである。

福音書中の他の登場人物

いくつかの場景では、多様な人物のせりふが挟まれており、それらは、そのつど然るべき歌手によって歌い分けられれば、立体的な効果も得られようが、一般的には、S, A, T, B それぞれの独唱者が掛け持ちで分担することが多い。合唱団の中から適材適所で演じら

れるのが望ましいのだが、レベルを揃えるのはなかなか容易ではない。

ソプラノ

女中 (S): Nr.38a で、2人が一言ずつ、ペテロがイエスとともにいたことを告発する。

ピラトの妻 (S): Nr.45a 中のたった4小節だが、夢見が悪かったのでイエスには関わらな、とピラトに忠告する。その後のピラトの裁きにあたえる影響を気遣わせて、緊張をもたらす。

アルト

証人(A): テノールと2人で証言する(Nr.33)が、同時に出ている大祭司(群)に距離をとるためか、2人とも群。

テノール

証人(T): Nr.33 同上。

バス

バスが受けもつ人物は多く、ユダ、ペテロ、大祭司、総督ピラト、祭司長2人の計6人である。(一般にイエスを取りまく人々のうち、言葉が残っているのはほとんど男性で、女性は、例外的な場合はあるにしても、無言の行為をもってイエスにつき従っている。これは現実でもそうであったろうが、集録した福音書記者の視点にもよるものであろう。)全員が群に配され、出番はピラトが最多の5回で、ユダ4回、ペテロ3回、大祭司2回、祭司長1回。

ピラト(B): ユダヤの大祭司の審問のあと、イエ

スはローマ総督ピラトのもとに回される。Nr.43 ではイエスに向かい、45a, 47, 50c では群集に、66c では祭司長・長老らに向かって、つぎつぎと質問し、命令を下してゆく。

ユダ(B): Nr.7(祭司長), 11, 26(イエス), 41a(祭司長・長老ら)と、相手を替えながら、破滅してゆく。(余談になるが、私には、ユダという人物は、自意識の強さに足をとられて、迂回した道をいつも辿らざるをえなくなった、不確実で影の多い人格だったように思われる。そういう面からも、Nr.42の正面切った堂々たるアリアを、ユダのアリアとする説は受け入れられない。)

ペテロ(B): Nr.16(イエスに), 38a(女中, の告発を受けて), 38c(群集に向かって)と、発言は少ないものの、その間に主への裏切りという大失態にたずさわり、福音史家の説明で、彼の刻々と変わりゆく行為が明かされる。

大祭司(B): Nr.33, 36a と、イエスに対する尋問に終始する。

祭司長, (B): Nr.41c. ユダの銀貨の処分にまつわる意見。

これらの具体的で活発なせりふが、福音史家の状況説明のあちらこちらに点在することによって、2000年昔の出来事が、今ここで、現実展開されるドラマのように鮮やかに、追体験されるのである。

表5: 独唱曲(レチタティーヴォとアリア, その他の登場人物)

独唱声部	群	曲数	曲番号(Ar:アリア, R:レチタティーヴォ, R-Ar:レチタティーヴォ-アリア)
ソプラノ(1名)			
R-Ar		6	Nr.12,13:R-Ar, 27a:Ar(二重唱), 48,49:R-Ar, 67:R(四重唱)
		1	Nr.8:Ar
女中(2人)	,	1	Nr.38a
ピラトの妻		1	Nr.45a
アルト(1名)			
R-Ar		8	Nr.5,6:R-Ar, 27a:Ar(二重唱), 30:Ar, 39:Ar, 59,60:R-Ar, 67:R(四重唱)
		2	Nr.51,52:R-Ar
証人		1	Nr.33
テノール(2名)			
福音史家		43	Nr.2,4a,c,e,7,9a,c,9d,11,14,16,18,21,24,26,28,31,33,41a,c,43,45a,47,50a,c,e,53a,c,55,58a,c,58e,61a,c,e,63a,c,66a,c
R-Ar		3	Nr.19,20:R-Ar, 67:R(四重唱)
		2	Nr.34,35:R-Ar
証人		1	Nr.33
バス(2名)			
イエス		11	Nr.2,4e,9c,11,14,16(+ ^レ テ),18,21,24,26(+ ^レ テ),28,36a,43(+ ^レ テ),61a
R-Ar		5	Nr.56,57:R-Ar, 64,65:R-Ar, 67:R(四重唱)
		3	Nr.22,23:R-Ar, 42:Ar
ピラト		5	Nr.43,45a,47,50c,66c
ユダ		4	Nr.7,11,26,41a
ペテロ		3	Nr.16,38a,38c
大祭司		2	Nr.33,36a
祭司長(2人)		1	Nr.41c

声部欄の(人数)は、当合唱団が予定しているソリスト数

「マタイ受難曲」における、「群の役割」(4)・付表

紙面の都合により、次回に属する付表を本文に先立って以下に掲載します。なお、次回(連載・4)は月報次号に掲載予定です。

表6:「マタイ受難曲」中のコラール 全15曲(3つの主要コラールとその他のコラール)

曲Nr.	調	旋律/群分類	曲名(邦訳は大村訳)	出典(歌詞作者/題名/旋律作者)
第1部				
Nr.1	ト長 (ホ短)	他 (合唱) S in rip.	O Lamm Gottes, unschuldig おおきよき子羊	Nikolaus Decius“Agnus Dei”のドイツ語訳に基づくコラール“O Lamm Gottes, unschuldig”(1529年以前)第1,2節。(旋律とも)
Nr.3	口短	Ⓑ ¹ +	Herzliebster Jesu, was hast du verbrochen わが主イエス 何故なれは	Ⓑ Johann Heermannの受難節コラール“Herzliebster Jesu, was hast du verbrochen”(1630)第1節。(旋律:Johann Crüger1640)
Nr.10	変イ長	Ⓒ ¹ +	Ich bin's, ich sollte büßen しかり そは われなり	Ⓒ Paul Gerhardtの受難節コラール“O Welt, sieh hier dein Leben”(1647)第5節。(旋律:Heinrich Isaac, 15世紀)
Nr.15	ホ長	Ⓐ ¹ +	Erkenne mich, mein Hüter 牧人イエスよ 認めたまえ	Ⓐ Paul Gerhardt 作の受難節コラール“O Haupt voll Blut und Wunden”(1656)第5節。(旋律:Hans Leo Hassler1601)
Nr.17	変ホ長	Ⓐ ² +	Ich will hier bei dir stehen みもとをわれは 離れ去らじ	Ⓐ 第6節
Nr.19	へ短	Ⓑ ² (レチティエウオ)	Was ist die Ursach aller solcher Plagen この煩いは いずこより	Ⓑ 第3節
Nr.25	二長	他 +	Was mein Gott will, das g'scheh allzeit み心は つねに成し遂げらる	Albrecht von Brandenburg 作コラール“Was mein Gott will, das g'scheh allzeit”(1547)第1節。(旋律:Claudin de Sermisy1529)
Nr.29	ホ長	他 (コラール編曲) S in rip. + +	O Mensch, beweine deine Sünde groß 人よ なが罪に泣け	Sebald Heyden 作の受難節コラール“O Mensch, beweine deine Sünde groß”(1525)第1節。(旋律:Matthäus Greiter1525)
第2部				
Nr.32	変口長	他 +	Mir hat die Welt trüglich gericht' いつわりの裁き 世はわれになせり	Adam Reusner 作の詩篇 31 によるコラール“In dich hab ich gehoffet, Herr”(1533)第5節。(旋律:ポヘミア民謡, 15世紀)
Nr.37	へ長	Ⓒ ² +	Wer hat dich so geschlagen 主を かくも打ち	Ⓒ 第3節
Nr.40	イ長	他 +	Bin ich gleich von dir gewichen 主を離れしわれ	Johann Rist 作, 夕拝用コラール“Werde munter, mein Gemüte”(1642)第5節。(旋律:Johann Schop1661)
Nr.44	二長	Ⓐ ³ +	Befiehl du deine Wege み手に委ねよ ながゆくてを	Ⓐ Paul Gerhardt 作の詩編 37-5 によるコラール“Befiehl du deine Wege”(1653)第1節。(旋律:Ⓐ)
Nr.46	口短	Ⓑ ³ +	Wie wunderbarlich ist doch diese Strafe! いかに恐るべき この裁き	Ⓑ 第4節
Nr.54	へ長	Ⓐ ⁴ +	O Haupt voll Blut und Wunden おお主のみかしら 血におおわれ	Ⓐ 第1,2節
Nr.62	ガキ ⁷ (八長)	Ⓐ ⁵ +	Wenn ich einmal soll scheiden いまはの時に 主よ かたえに	Ⓐ 第9節

表7:[参考]「マタイ受難曲」中のコラールと日本・ドイツの現行讃美歌

「マタイ受難曲」の曲番号	日本「讃美歌21」の曲番号と題名	ドイツ福音派教会讃美歌(現行)
Ⓐ(Nr.15,17,44,54,62)	#310 「血しおしたたる 主のみかしら」(#311)	EG 85 O Haupt voll Blut und Wunden
Ⓑ(Nr.3,19,46)	#313 「愛するイエス 何をなされて」	EG 81 Herzliebster Jesu, was hast du verbrochen
Ⓒ(Nr.10,37)	#295 「見よ十字架を 罪にまみれて」	EG 84 O Welt, sieh hier dein Leben
Nr.1	#87 「罪なき小羊 十字架にかかりて」	EG 190.1 O Lamm Gottes, unschuldig
Nr.25	#447 「神のみこころは つねに いと正しく」	EG 364 Was mein Gott will, das g'scheh allzeit
Nr.29	#294 「ひとよ なが罪の大いなるをなげけ」	EG 76 O Mensch, beweine deine Sünde groß
Nr.32	<なし>	EG 275 In dich hab ich gehoffet, Herr
Nr.40	#215 「心はずませ み前に進もう」	EG 475 Werde munter, mein Gemüte